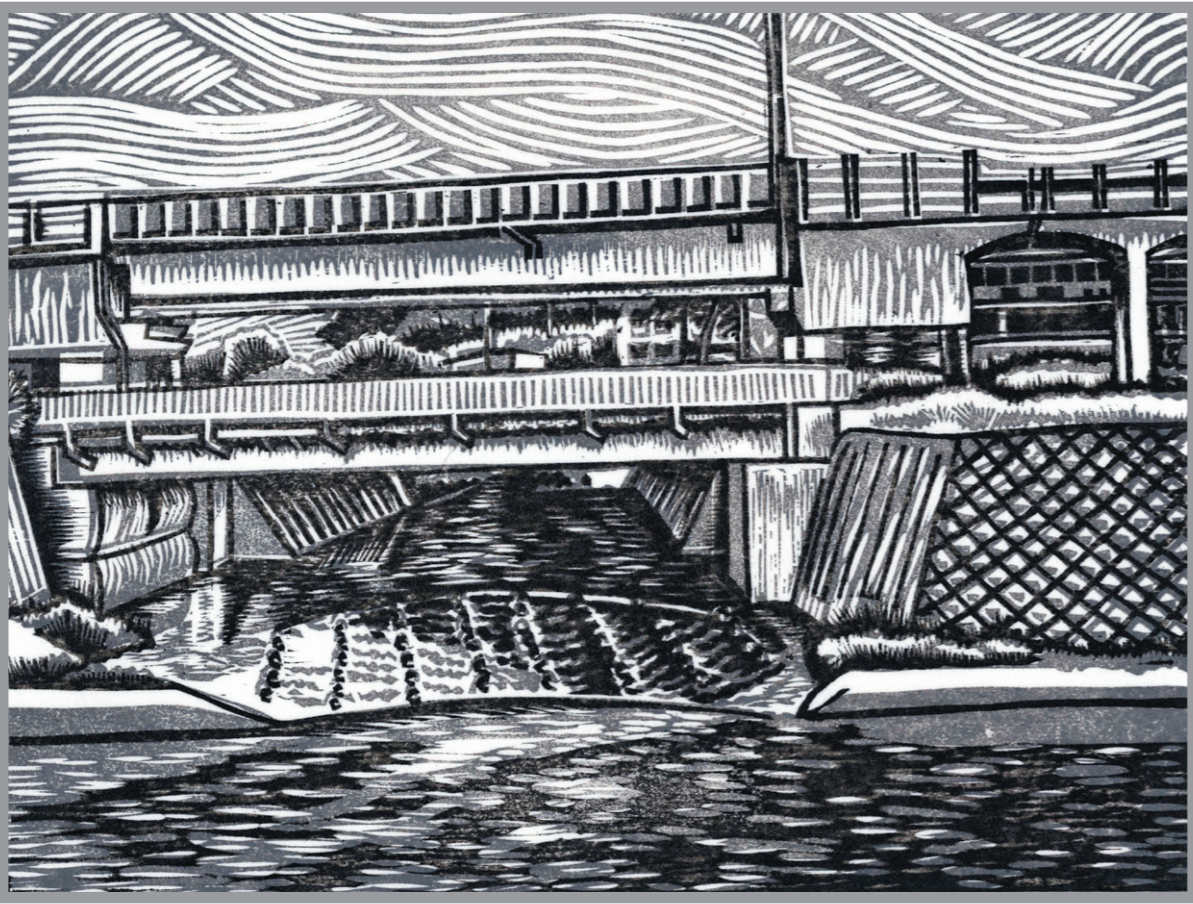


# いたちかわらばん

通刊 24号 鮠川・狹川 / 川原番・瓦版 04冬号



【版画 宗森英夫】

【いたち川と柏尾川の合流点】

新しい年を迎え、いたち川の散歩の足を下流まで伸ばしてみました。上流には上流の、下流には下流の顔が見られます。下流では川幅も広くなり、ゆったりとした流れは変化を見せることも少なく、静かに水鳥たちを遊ばせています。カルガモ、コガモ、オナガガモなど、柏尾川に近いからでしょうか、結構多くの水鳥を見ることが出来ます。こうした景色の中にいますと、清々しい気分になって心が洗われるようです。

でも、ちょっと悲しく思われることは、少しまとまった雨が降ると、増水と共にゴミも流れ着き、川の中に生えている木はゴミのなる木に変身したりすることです。それと、大きな排水溝から流れ出る汚水の放つ臭いには閉口してしまいます。これは、一日も早く解決したいことです。

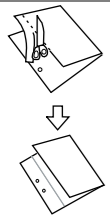
一方、水神橋右岸の水辺の草むらに沿って、赤いカンナの花が一面に植えられ、年々その列が延びていることにお気づきでしょうか？それは、「いたち川橋上流の土手にコスモス畑を出現させたい・・・」。そんな夢を持っておられるIさんのされている事。

川辺の斜面いっぱい、コスモスの花が色とりどりに風に揺れ、水辺には真っ赤なカンナの花の帯が、澄んだ青い水面にたゆたっていて、水鳥たちも幸せそうに羽を休めている下流。そんな夢の実現する日が、一日も早く訪れる事を願っています。

(あひる)

切り取り線

この部分を切り取ってファイルすると便利です。



【水辺愛護会だより】

## いたち川扇橋水辺愛護会

当会は"いたち川右支川愛護会""いたち川と親しむ会"の協力により平成15年5月19日付で、18名の会員によって正式に発足しました。

活動地域は、日東橋から辺瀨橋の間、および矢沢堀小川アメニティです。

扇を広げたような形をした赤い扇橋の架かるこの付近には、周辺住民の憩いの場である扇橋水辺広場があります。また、この付近は上流の稲荷森水辺広場と並んでいたち川の中では特に自然が多く残されているところです。

辺瀨橋の少し上流から二手に分かれた流れは比較的浅いので、夏には子供たちがウシガエルのオタマジャクシやザリガニなどを捕りにやって来ます。カワセミやサギの姿も頻繁に見ることができ、キジバトやカラスが遊ぶ水場として格好の場を提供しております。また、支流の矢沢堀アメニティを上流に辿ると一年中止まることのない水車を見ることができます。

私たちの活動は原則として、毎月第三日曜日の午前10時から1時間程行うことになっています。水辺の清掃や草刈は勿論ですが、子供達が川遊びをしても怪我をしないようにと、胴長を履いて川の中の危険なゴミを拾っています。

また、桂橋から日東橋にかけての川辺には、他のボランティアの人達と協力して花畑を作り、道行く人々に喜んで貰っています。

この花畑は周辺の住民が自由に参加出来るように柵を低く作ってありますので、花の好きな人が色々な花を植えにやって来ます。そのための看板も立ててありますので是非植えにきて下さい。

その他には、夏には"いたち川と親しむ会"が主催する"いかな祭り"を後援したり、川沿いのフェンスや扇橋水辺広場に趣向を凝らした美化看板を設置したりしています。散歩がてらに眺めて頂ければ幸いです。



(稲荷橋から下流を見る)



(矢沢堀小川アメニティの水車)

最後に、いたち川の本流を離れ、矢沢堀小川アメニティの方にも足を運んで頂きたいと思えます。小さなせせらぎにも発見があること間違いありません、そんな発見こそ、貴方の小さな財産になることでしょう。

現在、扇橋水辺愛護会は会員数が少ないですが、一人でも多くの仲間をつくり、いたち川を子供達の『ふるさとの川』になるように守り続けて行きたいと考えています。

(いたち川扇橋水辺愛護会 野地長生)

発行年月  
2004年2月

通刊24号

### 発行：狹川OTASUKE隊 (いたちがわおたすけたい)

OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係  
〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19  
TEL 045-894-8331 FAX 045-895-2260

栄土木事務所下水道係  
〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1  
TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421  
(お便り・お問い合わせはこちらまで)



# 夢いっぱい友達いっぱい命いっぱい

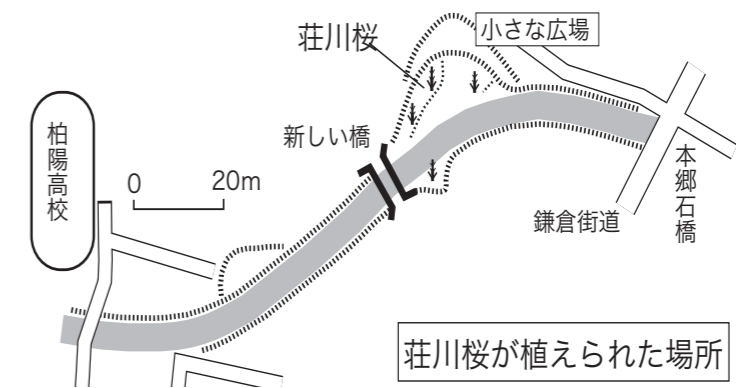
いたち川に

“ 莊川桜 ” をうえたよ！！

横浜市立西柴小学校



国道136号線御母衣ダムの上に咲く莊川桜



西柴小学校の4年2組の子供達は、総合学習で“夢いっぱい、友達いっぱい、命いっぱい”をテーマとして勉強をしています。その「命いっぱい」グループの中の「桜グループ」の子ども達が11月22日に、いたち川の本郷石橋下流の水辺に“莊川桜※”の苗木を4本植えました。

(※下段のリレートークも併せてご覧ください。)

「桜グループ」の子ども達は、岐阜県の莊川村の方から莊川桜の苗木を5本もらい、1本を自分の学校に、あとの4本をいたち川の水辺に植えたのでした。

他のグループの活動を紹介しますと、海・虫・水草・メダカ・渡り鳥などに分かれています。その中の海グループは、海の命いっぴいにするために、海のゆりかごと呼ばれている「アマモ」を金沢の海の公園に増殖させようという地域の人の活動に、小学生でもできることをしようと取り組んでいます。

## 桜グループの夢がかなったよ！！ — 子供たちの話 —

私たちが桜にかかわろうと思ったきっかけは、近所の桜並木が弱っているという話を聞いたからです。そのとき、私たちのクラスでは「命いっぴい」というテーマに取り組んでいました。そこで、「桜を守ろう！」と、桜グ

ループが出来たのです。まず、最初に私たちは、桜並木の商店街の人に、本当に桜が弱っているか聞き込みをしました。すると、本当に弱っていることが分かったのです。そして、区役所の人に、土木事務所に電話をしてもらいました。「何かしていいですか?」「やっていいですよ。でも水やりはむずかしいので、雑草取りとゴミ拾いならやってもいいですよ。とてもありがたいです。」という答えでした。そこで私たちはそれらの活動をしてきました。

ある日、担任の坂田先生が、莊川桜の歴史についてまとめられている「さくら」というビデオを見せてくれました。佐藤良二さんという人が植えた莊川桜は、1,500本以上でした。「すごいな——。よくできたな——。がんばったな——。」と思いました。最後に良二さんが死んだのは悲しかったけどすごく感動しました。その人の思いを引き継いで道下さんが苗木をつくっていることを聞き、桜の苗木を植えたいなと思いました。

先生が、今度は別なビデオを見せてくれました。それは、柏尾川のビデオでした。川を広げるために両側にあった桜の片側を切り落とし、また桜を植えるというものでした。先生から「ちょうどいたち川が川幅を広げ、

川沿いの広場に木を植える工事をしているよ。」と聞いたので、いたち川に桜を植えたいと思ったのです。

そこで私たちは、栄土木事務所の和久井さんと、苗をもらう岐阜県莊川村の道下さんに何回か手紙を書きました。お返事や桜の苗が届いた時は、とてもうれしかったです。いろいろな人の協力によって桜の木を植えることが出来ました、ありがとうございました。

私たちは、この2000年生まれの莊川桜を見守っていきたいと思います。

## 莊川桜とは

岐阜県の山奥にある大野郡莊川村で四五〇年余り生きている老木です。元々は、光輪寺、照蓮寺の両寺院にありましたが、ダム(御母衣ダム)の建設により湖底に沈む予定でした。しかし、「桜の木の命を守る」という多くの人々の気持ちが通じ、前例のない巨桜の大移植が昭和三十五年に行われ、奇跡的な成功を見たのでした。樹高30m、幹周約6m、重さ40トン弱の巨桜を鋼鉄製のソリに乗せ、ブルドーザー三台と五百人の作業員によって二百m高い位置まで運んだのです。

桜が活着したのを発見したのは、佐藤良二さんでした。名金線のバスの車掌さんだった佐藤さんは、バス路線沿いに桜を植える決心をします。千五百本まで植えたところで、佐藤さんは亡くなりますが、遺志は受け継がれ夢は実現します。そして、道下隆司さんは、莊川桜の二世を育てています。これまでに八百本の苗を日本全国に贈った「はなさか おじさん」です。

今回いたち川に移植された苗木を譲り受けるにあたり、西柴小学校の子供たちが道下さんからいただいたお手紙をご紹介します。

「命いっぴい」というテーマで桜の勉強をして綺麗な環境をつくる活動に取り組んでいる桜グループの皆さんに、とても感心しました。都市開発が進み自然が失われていきますが、私たちは自然のおかげで生きてゆけると思っています。一人ひとりが命を大切に、思いやる、その美しい心がきれいで豊かな環境を育てるのだと思います。喜んで、桜の苗木を五本送ります。

水人子(ミジンコ)

## いたち川で見られる植物 ③



### 春を待つギシギシ

冬の河川敷は、ほとんどの植物が枯れていて寒々とした感じですが、しかし、よく見るとススキやヨシの間に緑色の草が見え隠れしています。それらの中で最も大きな葉を持っているのがギシギシです。

冬の間は、地べたにはいつくばるように低いロゼット状ですが、春になると花芽をぐんぐん伸ばし、夏には一メートル位に伸びます。

スイバとよく似ていますが葉のふちがなみうっているのが区別できます。根は太く黄色で、その汁を皮膚病の外用として使用しています。また緩下薬として大黃の代用として使います。

たで科の多年草で、六〜八月頃に淡緑色の小さな花を輪生します。

(いもり)